

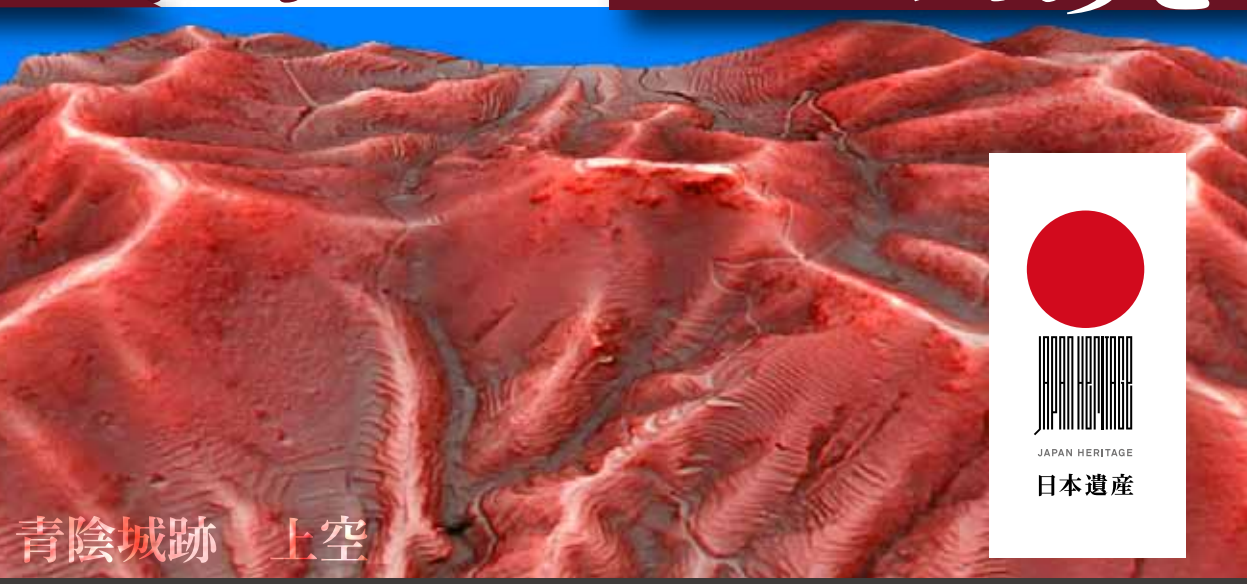
# 青陰城跡



尾道の歴史と遺跡シリーズ11

# 尾道市の 中世の城跡あと

赤色立体  
地形図  
せきしよく  
りつたいちず



青陰城跡 上空



JAPAN HERITAGE  
日本遺産

# 1 中世の城



平安末期から鎌倉初期にかけて、有力者の居館は方形区画の堀を巡らせるようになり、複数の郭を配置して各郭で機能を分担する、いわゆる「城館」が成立します。

## 山城

南北朝時代では、鎌倉幕府の権力の弱体化に伴って武士団が独立しました。武士団は、他の勢力からの攻撃を防ぐため、山上に臨時的な軍事施設である山城を築きました。山城は、自然地形自体が防衛の役割を持ち、要所に人工の防御施設（堀・土塁・柵・塀）を作るだけで城としての機能を十分に果たしました。また、山上は平地よりも視野が開けているため、敵の進攻を察知しやすく、少人数でも守りやすいなどの利点がありました。

## 平山城／平城

戦国時代前期では、本来は非常であったはずの戦が日常化したため、山城の各防御施設の工夫が進み、長期の籠城（ろうじょう）に備えて郭を広くするなどの発展が見られました。しかし、戦国時代後期になると、有力者は領国経営のために交通の便が良く、城下町の支配が行いやすい小高い山の上に城を築くようになります。この城は平山城と呼ばれます。そして、鉄砲の伝来と普及によって攻撃射程が拡大したことや領国経営の効率化などの理由から、次第に平地に城を築くようになりました。この城を平城と言います。

## 海城

海城とは、水軍力を持った海賊衆などの海上勢力が築いた城で、山城と同様に城郭を構えていますが、棧橋・岩礁ピット・船だまり（船の潮待ち、風よけのための停泊地）・水場（給水施設）などの施設が設けられ、海と潮流が堀と土塁の役割を果たした独特の城を指します。海城には、島を丸ごと城塞化するもの（能島城跡：愛媛県今治市）、岬に築かれ船の航行を監視するもの（美可崎城跡・馬神城跡）があり、これらの城は海上交通の要衝に立地して「海の関所」として存在し、船を見つけては関料や礼銭を受け取り、従わない者は海に沈めていました。因島村上氏の本拠となった因島や向島にも、海城の機能を持っていたと考えられる城跡が残っています。長崎城跡、美可崎城跡、馬神城跡、余崎城跡、岡島城跡などがこれに当たるものと考えられます。



▲鳴滝山から尾道市街地



# 城のしかけ

中世の城には、様々な“しかけ”が各要所に作られました。城という字が「土」と「成」から構成される所以ともなっています。

写真：広島県埋蔵文化財センター提供

## 土塁 どるい

山城は、尾根上に築かれることが多く、そのため、丘陵の尾根を分断する堀切は、敵の侵路を途絶えさせ、進攻を遅らせる目的でつくられました。少数で守る側が多勢で攻めてくる敵を迎え撃つために必要不可欠な防御施設です。



## 堀切 ほりきり

敵の侵入を防ぐため、城や豪族の住居などの周囲に築かれた土盛りです。堀を掘った土で作られることが多く、堀の深さと土塁の高さで容易に越えることができません。「土居」「土手」ともいわれます。山城などに見られる一般的な防御施設です。



## 郭跡 くるわあと

山頂部分や山頂に近い尾根上等に作られる平坦地。斜面を削ることによる切岸等によって成形されます。郭は戦国時代以降には曲輪あるいは丸ともいわれ、天守閣などが建てられました。中世の郭にも見張り台や建物などが建てられた痕跡があります。多くの城跡で複数の郭があり、多くの出土遺物が見つかる場合もあります。



## 畝状豎堀群 うねじょうたてぼりぐん

山の斜面に縦につくられ、敵の斜面の横移動を封じるための堀です。攻め手は、堀切のために道が途絶えた場合、山の斜面を行かなければなりません。守り手は、その山の斜面にも豎堀を設け、進攻が停滞したスキを見計らって反撃を加えていました。豎堀群は、豎堀を密集させて山の斜面に並べたものです。攻め手の横方向への動きをほぼ完全に封じます。攻め手は、歩きやすい堀の底を縦一列になって登るしか進む道はなく、かっこうの標的となりました。



# 2 尾道の主な城跡



尾道には、現在までに85ヶ所もの城跡が確認されています。これらは鎌倉、南北朝、室町、戦国と各時代において必要に応じて築かれ、短い期間で幕を閉じる城もあれば、改修・強化により長きにわたって戦略的な拠点であり続けた城もありました。

## 御調

### 丸山城跡

丸山城跡は、室町時代に三次地方の豪族三吉氏が御調町周辺まで勢力を伸ばした時、その家臣である上里氏が城主として入ったとされている。上里氏は、同三吉氏家臣である雲雀城主の池上氏や牛の皮城主の森光(守光)氏と行動を共にしたとされ、山陰地方の戦国大名・尼子晴久に従って、旧主の三吉氏を攻撃したとも伝えられる。



### 雲雀城跡

雲雀城跡は、雲雀山に築かれた城で、御調町域の主要通路を含む地域を見渡すことができる。山頂の削平地に主郭が存在し、その南西に深さ約14m、幅約3mの堀切を配して、主郭と尾根道を分断している。主郭の東側や北側にはいくつかの郭が段状に配置され、これらの方向からの攻撃を意識していたことがわかる。縦堀や土塁、井戸跡なども確認されている。

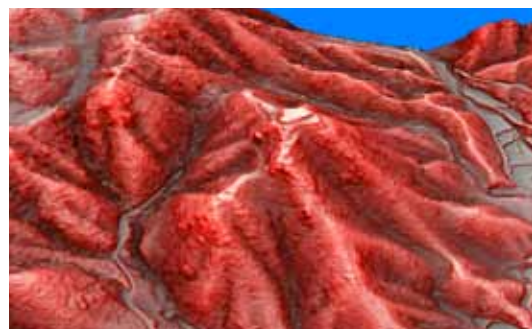


## 尾道

### 鷲尾山城跡

鷲尾山城跡は、標高330mの丘陵上に築かれた山城で、山頂の主郭を中心に各尾根上に複数の郭を配置している。山頂を中心に東西200m、南北300mの範囲に郭が配置される市内最大規模の城跡である。山頂の郭は、35×25mの平坦面で、礎石とも考えられる平石が点在している。山頂から北西方向へ伸びる尾根端には、深い堀切と縦堀が確認できる。城跡からは、土師質土器や備前焼甕、青花皿、瓦片などが採集されている。

城主は、杉原氏の一族、木梨杉原氏とされ、16世紀には尼子氏と大内・毛利氏の勢力争いの舞台ともなった。



### 鳴滝山城跡

鳴滝山城跡は、尾道水道の西口を見下ろす鳴滝山の頂上に築かれている。鎌倉時代末期に築城されたといわれ、室町時代には宮地氏が小串山城跡、太夫殿城跡、七曲城跡などの支城と連携しながら周辺海域の水運を掌握したとされている。



### 松尾山城跡

松尾山城跡は、港町尾道への東側からの進入口である坊地峠にさしかかる道を見下ろす松尾山に築かれた城である。当城周辺の太田地区は、南北朝時代、足利尊氏に従軍した杉原兄弟が戦功により与えられた土地のひとつである。その後、兄弟は木ノ庄木梨と高須を各々で支配する形を取り、やがて木梨杉原と高須杉原へと分家した。松尾山城跡は高須杉原氏が居城し、戦国時代、木梨杉原家が尼子方、高須杉原家が毛利方につき従い、一族の命運を分けている。



### 岡島城跡

尾道水道に浮かぶ岡島(小歌島)に築城され、元は宇賀島衆と呼ばれる海賊らが根拠地としていたとされる。宇賀島衆は、周辺海域で航行船舶から礼銭、関料を徴収していたようである。その様子は『老松堂日本行録』や『梅林守龍周防下向日記』などに記されている。しかし天文23年(1554)頃、海賊衆・因島村上氏と結んだ小早川氏によって滅ぼされている。その後、岡島城には岡島経営に乗り出した因島村上氏の支城とされたようである。





## 余崎城跡

余崎城跡は、向島南部の半島状に突き出た観音岬に築城され、「芸藩通志」によれば村上吉充の居城とされる。弘治元年(1555)の厳島合戦により向島を得た因島村上氏が、当城を向島経営の拠点としていたのではないかと考えられている。しかし、村上吉充の在城は短く、永禄10年(1567)には因島の青木城に本拠を移している。以後、余崎城跡には、村上氏の武将・宮地大炊助明光の次男島居次郎資長が居城したといわれる。



## 因島

### 青陰城跡

青陰城跡は、因島のほぼ中央部、風呂山と龍王山に挟まれた青影山頂に立地する。この城は、鎌倉時代末期から南北朝時代初期頃に活躍した村上義弘が南朝勢力として居城したという伝承がある。戦国時代においては、村上氏が大名の性格を帯びはじめると本拠城としての役割を果たしたとされる。



### 馬神城跡

馬神城跡は、因島の北西部に存在する城跡で、因島村上氏が第三の本拠とした青木城とは約1km離れた場所にある。当城は、海に面して広い海域を見渡すことができるため、海上を航行する船を監視する目的で築城されたのではないかと考えられる。山頂部の郭とその一段下の郭は広い平坦面を有しており、良好に遺存している。



### 青木城跡

青木城跡は因島の北西部に位置し、港町尾道の西口を押さえる場所にある。城跡周辺は埋め立てられ、陸地となっているが、当時は海に囲まれていたと考えられる。標高50mの竜王山の頂上を中心に、尾根上に複数の郭が設けられている。本城跡は、村上新蔵人吉充が永禄10年(1567)に向島の余崎城から移り、慶長5年(1600)に青陰城に移るまでの居城であったと伝えられている。



### 美可崎城跡

美可崎城跡は、三ヶ崎の先端部に位置し、宝亀2年(771)安芸国の中部瀬戸を守る海の関所が置かれたと伝えられる。室町時代は、因島村上氏が金山氏を奉行として置き、備後灘に行く船から運航税を徴収していたようである。主郭の北東に二の郭を構え、周辺は急斜面により、海に面している。岬の南側にある入江が「舟隠し」ともいわれる。半島の先端には、金山氏にまつわる伝説を持った地藏石(鼻の地藏)が地域の信仰をあつめている。



## 生口島

### 茶臼山城跡

茶臼山城跡は、生口島を南北に二分する山々のうち、観音山の一丘陵頂部に築かれている。主郭の北東側と南西側にそれぞれ郭が確認され、全体的に小規模な縄張りとなっている。南北朝時代では、南朝方が拠ったとされ、康永元(1342)年に小早川氏に落とされている。『芸藩通志』には戦国期の海賊衆・生口孫三郎景守の城とされており、俵崎城や瀬戸田の町並みや港を望む詰城の機能が考えられている。



# 3 発掘された中世城館



『城は支配者が合戦や支配のために築くもの』との見方が一般的です。しかし、発掘調査の成果によって、中世の城跡にも様々な形態が存在し、それぞれが役割を持って機能していたことが分かっています。その性格の違いを見分ける材料は、立地、地形と防御施設の組み合わせによる防御力の高さ、生活の痕跡から判断される城の機能した期間などがあります。尾道市で発掘調査された城跡は、牛の皮城跡、末近城跡、家ノ城跡、俵崎城跡の4城跡があります。

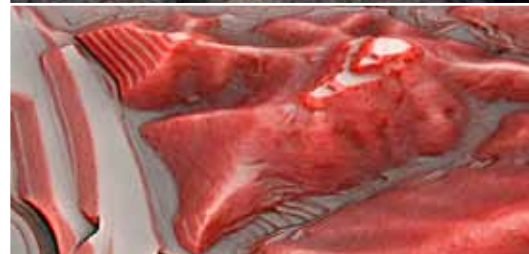
## 牛の皮城跡（尾道市御調町大町）

牛の皮城跡は、御調川を臨む険しい丘陵に築かれた山城です。北郭群と南郭群から成り、畝状豎堀と堀切によりほぼ全方向への攻撃に対応しています。城主は、戦国時代後期の人、森光新四郎景近と伝わっています。

発掘調査が実施された北郭群は、5つの郭を尾根に沿って段々に築き、東側と北西側に多くの畝状豎堀群を配置して防備を高めています。南西側に見られる二重の堀切は、南郭群への進攻を妨げるために道を分断しています。各郭において建物の痕跡は確認されていませんが、鉄釘が多く出土していることから何らかの簡易な建物が存在した可能性があります。北郭群高所の1～3郭では、15世紀末から16世紀前半の土師質土器皿や輸入陶磁器などの食器類をはじめとする生活道具が多く出土しており、生活の主要区画であったと考えられています。

また、低い地点の4・5郭では生活用具は少なく、周囲の畝状豎堀群と土塁によって下方の攻撃に備える区画であったようです。

南郭群は発掘調査が行われていませんが、畝状豎堀を西側、南側、東側に配置しており、北方に防御施設が見られないことから、北郭群にその役割を負わせ、南と北の郭が連携することでほぼ全方向からの城攻めに対応していたものと考えられます。



## 末近城跡（尾道市御調町植野）

末近城跡は、丘陵頂部が方形状に造成されて主郭を成し、北西側と南東側に伸びる長細い平坦面も城の一部（帯郭）である可能性があります。そして、主郭から北西側の帯郭への途中には薬研彫状の堀切が存在しています。南西側の帯郭にも防御用施設が存在する可能性はありますが、いずれにせよ小規模な城跡です。

発掘調査は主郭を中心として調査が実施され、主として掘立柱建物跡と近世の墓壇（ぼこう／墓穴）が多く検出されました。城跡にともなう遺物はわずかしこ出土していません。

当城は、戦国期の末近氏の居城と伝わります。しかし、小規模で軍事的な機能は低く、生活痕の乏しい様子からは領主の支配拠点を想定するできません。また、近世墓壇の存在から戦国期には城の機能が停止し、その後、墓地として利用していたことが明らかになっています。このような場所は、非常時の避難場所、または集会所などに広く利用された特別な空間、いわゆる「村の城」と考えられています。





## 家ノ城跡 (尾道市木ノ庄町)

家ノ城跡は、木梨杉原氏の本城である鷲尾山城跡の南にある小高い丘の上に築かれています。『芸藩通志』では、杉原為平が築城したとされます。当城は、山頂部と北西尾根を中心に発掘調査が実施され、建物跡をはじめ多くの遺構や遺物が出土しています。建物跡は5棟以上確認され、底をもつ比較的大きな建物もあったようです。銅製懸仏(かけぼとけ)と銅銭6枚等が出土した土坑もあり、また、郭の北西側に位置する幅6~8m、深さ約2mの堀切は、全体を掘り切るのではなく、中央部を土橋状に高く残し、通路として使用していたと考えられています。

出土遺物は、土師質土器皿、碗、坏、瓦質土器鍋、備前焼播鉢、輸入陶磁器などの他、鉄鏃や兜片、釘などがあります。また、石製のサイコロも出土しています。このような遺物から、城が機能していた時期は、14世紀中頃と考えられています。



## 俵崎城跡 (尾道市瀬戸田町瀬戸田)

俵崎城跡は、生口島の北西部にあって、佐木島・高根島に挟まれた水道のほか、三原湾、因島を見渡すことのできる眺望の良い低丘陵に築かれた山城です。沼田小早川氏の庶流の一族・生口氏の館城的な性格を持った山城と考えられ、港町瀬戸田と港湾の監視・警護活動の拠点であった可能性が考えられます。

標高約30mの最頂部を主郭として、北側から南東側にかけて3つの郭が存在しています。主郭西側の下方には堀切、北西側には畝状に並ぶ2条の堅堀が配置されています。

出土遺物は、14世紀後半から16世紀後半までの土師質土器のほか、輸入陶磁器、備前焼の甕、肥前系の陶磁器など多くの生活用具が見られます。城としての機能を高めたのは、土器の出土量や遺構の内容から16世紀前半以降と考えられています。この頃、主郭には礎石建物が建てられ、柵または塀の巡る土塁や堀切、堅堀が構築されていることから、長期にわたる拠点として整備されたことがわかります。

低い山に立地すること、比較的広い郭を持つこと、防御施設をよく整え、建物を置いていることなどから、当城は館と城の両方の性格をあわせ持った城として機能していたのではないかと考えられます。そして、詰めの山城としての性格が強い茶臼山城跡と連動して生口島北部を支配していたと思われます。





青陰城跡

## 赤色立体地図

地形の凹凸や傾斜量を「赤色の彩度と明度」で表しています。  
火山・地すべり・断層地形の把握、遺跡・古墳調査や石垣など幅広く活用されています。  
国土地理院のホームページから閲覧が出来ます。

中国管内航空レーダー測量業務平25中公第92号及び広島県航空レーダー測量業務データを使用

尾道の歴史と遺跡シリーズ11  
「尾道市の中世の城跡」  
令和6年3月  
編集：尾道市企画財政部文化振興課  
地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業

問合せ先 〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目15番1号  
尾道市企画財政部文化振興課 / Tel.0848-20-7425

